



●写真4 アスプルンドが設計した市営「森の墓地」は自然公園だ

「風にゆれて葉っぱが鳴ってる」。世界遺産のストックホルム

を受けることができる。
「就学前教育」の場で2年かけて就学の間を集団で検討し、就学後も親と教員、専門家が話し合っ、場や内容の変更も可能だ。障害のある子と同様に移民の子らへのそれぞれの母国語教育や補習授業では専門教員が教える。そうした社会のシステムが一人ひとりの困難を重層に支えている。
北欧の暗く、寒く、長い冬は豊かさにも変わるのだ。

市営「森の墓地」でカミさんが言った。
ヤマナラシ（＝山鳴らし。ポプラの一種）の樹だ。「森の礼拝堂」に向かう道に並んで鳴っている。季節は秋。空は濃い蒼色で、北欧にはめずらしい快晴だ（写真4）。重松清の小説『十字架』は、この「森の墓地」を舞台にしている。
スウェーデンの人たちは時間には厳格だ。時は有限で、最大限に活用しなければならぬものと考

えているそう。おそろしいほどの早歩きもそのせいなのかな。
そして、人生の時間がとまったとき、ヤマナラシの樹の葉が鳴っている。人は森に還る。

「どうして、何度も北欧を旅するんですか？」と聞かれる。
「発達保障の考えは、個人、集団、社会の系の発達を統一的にとらえることを基本としています。

北欧度クイズ①

写真の「わたし」は誰でしょう？

- ①ノーベル
- ②バンク・ミケルセン
- ③アンデルセン

正解の方から抽選で3名に、拙著「北欧 考える旅」をプレゼント。編集部宛に応募してください。

＜応募方法は49ページ＞



北欧の福祉や教育は、障害があってもなくても18歳で独立できるよう、集団や社会が個を支えるシステムをさまざまにはりめぐらしています。そうした社会の有り様を、学び、感じることは発達保障の思想や実践を深める。
でも、北欧を旅すると、あたりまえのことが実に「あたりまえ！」と確信できる。時々そんなころの「深呼吸」が必要だ。
*
旅で見て、聞いて、感じたことを写真とエッセイで綴ります。

●そのべ ひでお 1956年群馬県生まれ。85年より全障研事務局。日本障害者協議会（J D）情報通信委員長。

北欧の旅含め、詳しくはホームページ<http://www.nginet.or.jp/~kinbe/>

北欧 福祉と教育 街歩き

①出生率の秘密

蘭部英夫＝文・写真

メモ①

デンマーク 人口544万人／首都＝コペンハーゲン（人口約80万人）

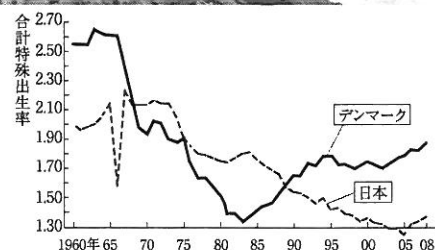
14世紀後半、北ドイツのハンザ同盟に対抗したデンマーク・スウェーデン・ノルウェーの「カルマル同盟」で君臨する。16世紀にスウェーデンが独立、300年にわたる抗争が続いた。第2次世界大戦ではナチスの侵略に3日で降参したもの、根強いレジスタンス運動を行う。70年代のオイルショックをきっかけに風力発電にとりくみ環境先進国に。



by Kinbe & Ryo



●写真1 デンマーク王立劇場前広場（コペンハーゲンの繁華街）の無料スケートリンクで。冬の北欧ではあちこちにスケートリンクがつくられる。気温は旭川と同じくらい。寒い



●図 デンマークと日本の出生率

北欧を訪ねるたび、子連れの若いカップルがどんどん増えている感じがする。ホントに街に多い。
写真1は冬、1月のデンマークの首都コペンハーゲンの繁華街だ。写真2は秋だ。同じ広場をカッコいいサングラス姿のお父さんが子連れ自転車している。

「幸福度世界一」といわれるデンマーク。出生率は1・9を超える。日本は、73年に2・08の人口置き換え水準を割ってから下がり続け1・37（図参照）。「幸福度」は90位だ。「母になるのにベストな国」はお隣スウェーデン（写真3）がトップで日本は36位。

コペンハーゲン郊外のお宅を訪問したことがある。脳性まひと知的障害のあるアーニヤ（当時15歳）を育てるスザンヌさん（当時39歳）の言葉がこころに残っている。
「子どものことを心配しない親はいない。でも18歳になったらこの子は家を出てグループホームで暮らす。それがしあわせ。」
アーニヤの成人後、彼女はフルタイム労働に戻ったそう。

北欧の「福祉国家」の基盤をつくったのは女性の社会進出だ。スウェーデンなら、両親に合計480日間の休職期間（390日まで給与80%支給）がある。6歳未満の子どもをもつ女性の78%が働き（日本35%）、管理職の31%が女性だ（日本10%）。子育ての環境が保障されることによって、労働力と国民所得増による高い税収が「高福祉」を支える。
そして、障害があれば、市スタッフの訪問、相談、指導があり、親の会が組織され、専門的な保育